

心の中に潜んでいるモノ

益田東高等学校 三年 渡邊真美

「分かった、うちがその国家資格取ったるわ。」

そう心に決めたのは中学二年の冬、私と母が些細なことでもめた日のこと。私は母に、イライラして暴言を吐き、母を深く傷つけてしまったのです。人は、自分を優位につけたい時、相手の弱いところをグサリと突くのが手っ取り早いので、平気で暴言を吐いてしまうものです。

母は、私が小学六年生の時に交通事故に遭い、片足が全く動かなくなっていました。熱いとか痛いとかの感覚がなく、今だに何かの支えがないと歩けません。母がこんな状態になってしまったのは、母が夜勤で出かけたある夜のこと。「事故に遭ったみたいやからちょっと行ってくるわ。留守番頼んだで。」そう言って、父は慌てて家を飛び出していきました。二人の弟は小学一年生と二年生。翌朝、ベッドに寝ている母の姿には目立った傷もなく、ぐっすりと寝ていて、私はホッと安心して学校に行きましたが、帰ると母の姿はなく、前日の事故が原因だということは、幼い私でもわかりました。入院したのです。

「ちゃっちゃと検査終わらして、歩けるようになって帰るから待っていな。」と、母は笑いながら言ってくれました。けれどその日を境に、何週間も母は帰ってきませんでした。毎日交替で、母の友人や叔母がご飯を作りに来てくれ、生活の不自由は感じませんでしたが、母が無性に恋しかったです。母とは、毎日メールや電話で連絡を取っていましたが、会えない寂しさには勝てませんでした。三人姉弟の一番上として、しっかりしていなければいけないという、使命感のようなものがありました。でもそのことがプレッシャーでもありました。周りの人たちや病院の方たちのお蔭もあり、母はやっと家に帰ってくることができました。けれども以前のように歩けません。家の中では車椅子でした。何度もバランスを崩しては転んでいる母を、さっと起こしてあげようにも私には力がなく、崩れるように倒れる母の姿に涙ばかりが出ました。

テレビで弱い者いじめをして、死に追いやっている事件をよく耳にします。いじめはいけないと思っているこの私が、なんと、ある日いじめる側になったのです。最愛の母をこの私がいじめていくのです。それは、母に叱られた時。腹いせで反射的に私は、母の動かない足のことを言って攻めていくのです。「足が悪いクセに…。」すると、さっきまで威勢よく叱っていた母が急に黙り込んでしまったのです。「しまった。」と思い、直ぐに謝ろうとしましたが、「ごめんなさい」が素直にできません。なんて情けない小さな自分。卑怯者。母は涙を流しながら、もうこれ以上よくならないと言われたことや、今まで話さなかった足への思い、私たち子どもたちへの思いを、歯を食いしばって話してくれました。母が昼間だけでなく、夜も働いていた理由は、夢だったお店を開くため。小さなお店で毎日好きな料理を作り、お客さんと楽しく話がしたいというものでした。攻撃していたはずの私は、一生懸命に自分の夢を話す母と、夢に向かって頑張っている母に、親子の関係が逆になるような思いが湧き、ふっと笑ってしまいました。なぜか私もその夢に向かって一緒に進みたかったのです。お店を開くためには、国家資格がいることもわかりました。

「分かった、うちがその国家資格取ったるわ。」「ほんなら、それまでにもっと動けるようになっておくわ。車やて運転したる。」と、涙声だった母の言葉は力強くなり、顔は輝いていきました。母が、わずか一センチでも動かそうと、凄まじい形相で立ち向かう姿を見て、私も少々のもことで弱音を吐くまいと思いました。父も母を乗せて運転したり車椅子を押したりと、一家のリーダーとして、頼りになり明るい家庭にしてくれています。みんなに支えてもらい、母は心も体も少しずつ元気になっています。私も柔道部に入って、心身を鍛えています。

人は、いついじめる側になるかわかりません。この私がそうだったように。誰の心の中にも潜んでいる、得体のしれない魔物のようないじめの心。今の自分が正しいのかそうでないのかを、常に意識して自分の心の中に問い続けながら、生きていかなければならないということを身をもって知りました。そして、素直な心で、まっすぐに進んでいかなければいけないということも。

母の夢である小さなお店を開くことが、私の今からの夢であり、私と母との約束です。